

自由論題 4「アジアの都市と農村」・報告 1

報告テーマ

地域住民の「自助」が農村の経済発展に与える影響
—韓国セマウル運動における「契」の役割を中心に—
Effects of Local Residents' 'Self-help' on Rural Development:
An Analysis of the 'Kye' in the Korean Saemaul Movement

氏名(所属)

李 昭憲(東京大学・院)

要旨(800字程度)

本研究の目的は、韓国のセマウル運動の過程における農村の経済発展に対して、村の住民による自生的な自助努力、とりわけ「契(ケ)」組織がどのような影響を与えたのかを明らかにすることである。

セマウル運動は 1970 年代に韓国の全国農村で行われた官主導のトップダウンな農村開発政策である。当時の朴正熙政権は、農村貧困の原因として住民の無能を指摘し、住民の自助精神の啓蒙により開発事業に参加させた結果、農村経済が著しく発展したと評価する。一方「契」とは、日本の「講」に類似するもので、韓国の農村に古くから受け継がれてきた自生的な自助組織を指す。

先行研究では、政府の評価に基づき、村の住民について上からの開発政策の消極的な受容者として捉え「朴政権のリーダーシップ、行政体制の整備、競争インセンティブ」といったトップダウンな要因から 1970 年代の農村経済の発展を分析している。一方、「ソーシャル・キャピタル、伝統的な協同慣習」など、ボトムアップな要因を指摘する研究もあるが、単に伝統的な農村社会に存在した諸要素を記述するだけで、開発事業への住民参加と、その結果として村の発展にどのように影響したのかについては明らかにできていない。しかし、植民地支配、独立、朝鮮戦争を経てセマウル運動に至るまで、「契」組織が農村の村において、住民によるインフォーマルな自助組織として村の発展に重要な役割をしたのは明確である。

本研究は、農村住民を村の発展における戦略的な主体として捉え、ボトムアップな観点から 1970 年代の韓国農村の発展要因を分析する。具体的に、政府のコントロールが届かない自生的な自助組織として「契」を取り上げ、村単位の開発事業への住民参加にどのような役割をしたのか、その参加メカニズムを提示する。それを通して、農村住民の自助努力が農村の発展に与えた影響を明らかにする。

その際に、韓国セマウル中央研修院が所蔵する国家指定記録物と現地調査で収集した住民作成資料に依拠して分析を行う。